平成２８年度

文部科学省委託「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」

幼児期に育みたい資質・能力を支える指導方法と評価に関する研究

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の観点から

平成２９年３月

国　立　大　学　法　人　神　戸　大　学

協力：全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会

本報告書は，文部科学省の「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」の委託費による委託業務として，＜国立大学法人神戸大学＞が実施した平成２８年度幼児期の教育内容等深化・充実調査研究の成果を取りまとめたものです。
したがって，本報告書の複製，転載，引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。

本稿は，平成２９年３月に告示される予定の幼稚園教育要領が示される前に執筆しているため，当該幼稚園教育要領とは異なる点があります。

はじめに

私たち神戸大学附属幼稚園は，文部科学省初等中等教育局幼児教育課が提供する助成制度（平成 28 年度 幼児期教育内容等深化・充実調査研究）に応募いたしました。これまで本園が取り組んできている文部科学省研究開発（平成 25 年度～28 年度 研究課題は「幼稚園と小学校の円滑な接続に資する子どもの学びに着目した幼児教育と小学校教育９年間を一体としてとらえた教育課程の大綱となる『初等教育要領』の開発」）の内容に鑑み，この助成制度の案内に記載されていた複数の調査研究テーマから，「幼小接続の円滑な実施を図るためのカリキュラムの在り方に関する調査研究」を選び，それに資することができる調査研究課題として，「幼児期に育みたい資質・能力を支える指導方法と評価に関する研究－幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の観点から－」を設定しました。その結果，委託を受けることになり，本報告書の完成に結びつきました。

こうした調査研究テーマおよび調査研究課題を踏まえると，現在，中央教育審議会において議論されている幼小の円滑な接続を保障・実現できるカリキュラムのあり方を，幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を軸にしながら明らかにすることが研究目的となります。そして，研究方法としては，できる限り多様な関連事例を収集した上で，それらを整理・分析することとしました。さらに，就学以後の学びをどのように評価すべきかを見据えて，幼児期から接続期にかけての評価のあり方も検討することにしました。本研究に具体的に取り組んでいくにあたりましては，実に多くの人々や組織からの親身なご助言・ご協力・ご尽力を賜りました。

まずは，白梅学園大学子ども学部教授・無藤隆先生，國學院大學人間開発学部教授・神長美津子先生には，本園等での講話を通して本研究の方向性などについて重要なご示唆をいただきましたこと，深くお礼を申し上げます。また，研究協力団体として，全国の国立大学附属幼稚園からの事例収集等に関してお力添えをいただいた全国国立大学附属幼稚園学校連盟幼稚園部会の皆さまに心より感謝を申しあげます。特に，近畿地区の附属園に所属されている副園長の皆さま（滋賀大学教育学部・塩見弘子先生，京都教育大学・村田眞理子先生，大阪教育大学・小池美里先生，兵庫教育大学・岸本美保子先生，奈良教育大学・竹内範子先生，奈良女子大学・飯島貴子先生）には，事例収集に際しての調整や講話内容の整理などで大変にお世話になりました。改めてお礼を申し上げます。さらに，意義深い実践に基づく具体的な事例を提供くださいました全国のすべての国立大学附属幼稚園（48 園）の皆さま，兵庫県内の公立幼稚園（29 園）の皆さま（川西市・２園，赤穂市・１園，神戸市・２園，明石市・16 園，三木市・８園），本当にありがとうございました。

この報告書で示されている本委託研究の成果が，今後さらにその輪郭が明確になっていくと期待される新たな幼稚園教育要領の内実に資すること，全国の現場で日々子供達とかかわっておられる先生方の実践に少しでも寄与することを願います。

神戸大学附属幼稚園

園長　　伊藤　篤

目　次

Ⅰ　研究の概要 …… 5
1　研究の背景 …… 5
1）幼児教育と小学校教育の接続の現状 …… 5
2）「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）」との関連 …… 5
3）神戸大学附属幼稚園・附属小学校の現状 …… 7
2　研究の目的 …… 8
3　研究の仮説 …… 9
4　研究の方法 …… 9
Ⅱ　研究の内容 …… 11
1　事例の収集と分析 …… 11
1）事例のフォーマット …… 11
2）神戸大学附属幼稚園の事例について …… 17
3）研究協力園の事例について …… 21
4）事例の分析方法 …… 22
2　幼児期に育みたい資質・能力の発揮・伸長を支える指導方法 …… 31
1）健康な心と体 …… 32
2）自立心 …… 36
3）協同性 …… 40
4）道徳性・規範意識の芽生え …… 46
5）社会生活との関わり …… 49
6）思考力の芽生え …… 52
7）自然との関わり・生命尊重 …… 57
8）数量・図形，文字等への関心・感覚 …… 60
9）言葉による伝え合い …… 62
10）豊かな感性と表現 …… 65
3　幼児期に育みたい資質・能力の発揮，伸長を支える評価 …… 68
1）資質・能力の発揮，伸長を「とらえる（可視化する）」取組 …… 69
（1）子供の資質・能力の発揮，伸長を可視化する実践記録フォーマットの活用 …… 70
（2）子供の資質・能力の発揮，伸長を可視化するドキュメンテーションの作成 …… 71
2）資質・能力の発揮，伸長を「支える」取組 …… 73
（1）子供の資質・能力の発揮，伸長を可視化する実践記録フォーマットの活用 …… 73
（2）子供の資質・能力の発揮，伸長を支えるドキュメンテーションの活用 …… 74
（3）子供自身の振り返りによる資質・能力の発揮，伸長を支えるICT機器の活用 …… 76
3）資質・能力の発揮，伸長を「発信する」取組 …… 76
（1）実践記録で子供の資質・能力の発揮，伸長を発信する …… 76
（2）ドキュメンテーションで子供の資質・能力の発揮，伸長を発信する …… 77

Ⅲ　研究の成果と今後の課題 ……79
1　研究の成果 ……79
2　今後の課題 ……80

参考資料……81
◆「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についての勉強会講話内容 ……81
白梅学園大学子ども社会学部教授　無藤隆氏 ……81
國學院大學人間開発学部教授　神長美津子氏 ……89

◆実践記録（抜粋）

番号	園　名	事　例　名	年齢	月	資料頁
2	神戸大学附属幼稚園	お友達がいるからお母さんと離れてみようかな	3歳	5月	98
3	神戸大学附属幼稚園	三輪車 空いてるよ！	3歳	5月	100
8	神戸大学附属幼稚園	行くよ，ジャンプ！	3歳	10月	102
9	神戸大学附属幼稚園	バーベキューごっこしよう	3歳	11月	105
14	神戸大学附属幼稚園	泥に入って遊ぼう	4歳	6月	109
17	神戸大学附属幼稚園	ザリガニの住処をきれいにしよう	4歳	9月	113
19	神戸大学附属幼稚園	板の上，歩けるかな？	4歳	10月	116
25	神戸大学附属幼稚園	幼虫がいた！飼ってみよう！	5歳	6月	119
27	神戸大学附属幼稚園	スズムシの居心地を良くしてあげたい	5歳	6月	122
31	神戸大学附属幼稚園	みんなで頑丈な秘密基地を作りたい	5歳	10月	125
36	神戸大学附属幼稚園	劇の準備をしよう	5歳	2月	128
国9	茨城大学教育学部附属幼稚園	トンボやメダカの住む池になるといいね	5歳	5月	130
国10	宇都宮大学教育学部附属幼稚園	「また来るといいね」	5歳	6月	135
国14	東京学芸大学附属幼稚園	どうやってリレーを走る？	5歳	9月	139
国14	東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎	ルビーちゃん(モルモット)のお世話はみんなでしたい	5歳	11月	142
国16	山梨大学教育学部附属幼稚園	「仲間はずれ」のチューリップをなくしたい	5歳	4月	145
国18	富山大学人間発達科学部附属幼稚園	美術館へ出かけよう	5歳	10月	148
国19	金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園	色々な国旗を描こう	4歳	9月	151
国22	上越教育大学附属幼稚園	修了証書をつくろう	5歳	6月	153
国28	大阪教育大学附属幼稚園	自分の行動を振り返る	5歳	9月	156
国46	熊本大学教育学部附属幼稚園	築山からソリが滑るように，橋をかけるぞ！	5歳	10月	158
公3	赤穂市立坂越幼稚園	アイスクリーム屋の看板を取りつけよう	5歳	10月	160
公4	神戸市立神戸幼稚園	流しそうめんしよう	5歳	8月	163
公7	明石市立明石幼稚園	綱引きで負ける悔しい気持ちに折り合いをつける	5歳	9月	165
公8	明石市立松が丘幼稚園	松ぼっくりの種を集めて遊ぼう	4，5歳	10月	167
公26	三木市立緑が丘東幼稚園	帽子取り「友達の思いを受け止め，折り合いをつける」	5歳	9月	169
公29	三木市立よかわ幼稚園	真ん中がどこかを知りたい	5歳	9月	171

※　本報告書付属のCD-ROMには，本研究に関わる全ての事例を保存しています。
25頁から30頁の折込一覧表を参考に各事例をご覧ください。

Ⅰ　研究の概要

1　研究の背景

1）幼児教育と小学校教育の接続の現状

「幼稚園教育要領」（平成 20 年 3 月告示）において，「幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続のため，幼児と児童の交流の機会を設けたり，小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会を設けたりするなど，連携を図るようにすること」が新たに明記され，「小学校学習指導要領」においては，「幼稚園（中略）との間の連携や交流を図る」ことが従前より明記されていることに加え，一部教科に新たに規定されている。

これらを受けて，幼稚園と小学校において，幼児や児童，教員同士の交流の取組が，各地で推進されてきているものの，幼稚園と小学校において，互いの教育内容及び指導方法等についての相互理解の深化や一貫性を持った教育課程の編成が十分になされているとは言えない状況にある。

平成 26 年度幼児教育実態調査（文部科学省）によると，平成 25 年度の実績で，小学校の児童と交流を行なった幼稚園は，全体の 76.9%であり，教師との交流を行った幼稚園は，全体の 72.1%であった。また，平成 26 年度の教育課程の編成にあたり，小学校と情報交換をするなどの連携をした幼稚園は，全体の 54.8%であった。一方，市町村ごとの幼小接続の状況において，接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている市町村は 21.5%に過ぎない。

その理由については，幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続に関するアンケート調査（平成 21 年　文部科学省）が参考になろう。これによると「接続関係を具体的にするのが難しい」が 52%，幼小の教育について「十分理解しているとはいえない」が 34%，接続した教育課程の編成に「積極的ではない」が 23%となっている。

このように幼稚園と小学校の教師は連携や交流の重要性は理解しているものの，接続を見通した教育課程の編成・実施がなかなか進まない現状がある。

2）「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）」との関連

平成 26 年 11 月に文部科学大臣から「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」諮問が行われたことを受け，中央教育審議会において，改訂の基本的な考え方が，平成 27 年 8 月に「論点整理」としてまとめられた。この「論点整理」を踏まえ，各学校段階等や教科等別に設置された専門部会において審議され，平成 28 年 8 月 26 日に中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会において「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」が取りまとめられ報告されている。

ここでも，「幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続などについて充実を図り，その趣旨については，国立教育政策研究所の教育課程研究指定校の研究成果等から，おおむね理解され

ている。」ことが報告されている。しかしながら，一方で，「幼稚園教育と小学校教育との接続では，子供や教員の交流は進んできているものの，教育課程の接続が十分であるとはいえない状況であったりするなどの課題も見られる。」ことも指摘されている。

本研究との関連が深い指摘も多く，具体的には，「幼児教育において育みたい資質・能力と幼児期にふさわしい評価の在り方について」において，「幼児教育における『見方・考え方』」，「幼児教育において育みたい資質・能力の整理と，小学校の各教科等との接続の在り方」，「資質・能力を育む学びの過程の考え方」，「幼児期にふさわしい評価の在り方」などが特に関連が深いと考える。

幼児教育における「見方・考え方」は，「幼児がそれぞれの発達に即しながら身近な環境に主体的に関わり，心動かされる体験を重ね遊びが発展し生活が広がる中で，環境との関わり方や意味に気付き，これらを取り込もうとして，諸感覚を働かせながら，試行錯誤したり，思い巡らしたりすることである。」とされ，「遊びや生活の中で幼児理解に基づいた教員による意図的，計画的な環境の構成の下で，教員や友達と関わり，様々な体験をすることを通して広がったり，深まったりして，修正・変化し発展していくものである。こういった『見方・考え方』が幼稚園等における学びにつながるものである。」とされている。

また，「幼児教育において育みたい資質・能力の整理と，小学校の各教科等との接続の在り方」では，育成を目指す資質・能力の三つの柱を幼児教育の特質を踏まえ，具体化して整理され，「個別に取り出して身に付けさせるものではなく，遊びを通しての総合的な指導を行う中で，『知識・技能の基礎』，『思考力・判断力・表現力等の基礎』，『学びに向かう力・人間性等』を一体的に育んでいくことが重要である。」と指摘されている。

そして，5 領域の内容等を踏まえ，平成 22 年に取りまとめられた「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」を手掛かりに，資質・能力の三つの柱を踏まえつつ，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が 10 項目で示されている。この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は，「5 領域の内容等を踏まえ，特に 5 歳児の後半にねらいを達成するために，教員が指導し幼児が身に付けていくことが望まれるものを抽出し，具体的な姿として整理したものであり，それぞれの項目が個別に取り出されて指導されるものではない。もとより，幼児教育は環境を通して行うものであり，とりわけ幼児の自発的な活動としての遊びを通して，これらの姿が育っていくことに留意する必要がある。」とされている。

また，これらの姿は「5 歳児だけでなく，3 歳児，4 歳児においても，これを念頭に置きながら 5 領域にわたって指導が行われることが望まれる。その際，3 歳児，4 歳児それぞれの時期にふさわしい指導の積み重ねが，この『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』につながっていくことに留意する必要がある。』と指摘されている。

さらに，「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』は，5 歳児後半の評価の手立てともなるものであり，幼稚園等と小学校の教員が持つ 5 歳児修了時の姿が共有化されることにより，幼児教育と小学校教育との接続の一層の強化が図られることが期待できる。」と指摘されている。

加えて，「幼児期にふさわしい評価の在り方」についても言及されている。

まず，幼稚園における評価について，「現行の幼稚園教育要領第 2 章『ねらい及び内容』に示された各領域のねらいを視点として，幼児の発達の実情から向上が著しいと思われるものを評価してきた」とこれまでの評価について示した上で，「次期幼稚園教育要領等においては，『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』の明確化の方向性が示されることに伴い，幼児期の評価についても，その方向性を踏まえ，改善を図る必要がある。」と指摘されている。

具体的には，以下のとおりである。

① 幼児一人一人のよさや可能性を評価するこれまでの幼児教育における評価の考え方は維持する。
② 評価の視点として，幼稚園教育要領等に示す各領域のねらいのほか，5 歳児については，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた視点を新たに加える。
③ 他の幼児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定によってとらえるものでないことに留意する。
④ 幼児の発達の状況を小学校の教員が指導上参考にできるよう，指導要録の示し方の見直しを図る。
⑤ 指導要録以外のものを含め，小学校と情報の共有化の工夫を図る。
⑥ 日々の記録や，実践を写真や動画などに残し可視化したいわゆる「ドキュメンテーション」，ポートフォリオなどにより，幼児の評価の参考となる情報を日頃から蓄積する。
⑦ 幼児の発達の状況を保護者と共有することを通じて，幼稚園等と家庭が一体となって幼児と関わる取組を進めていく。

3）神戸大学附属幼稚園・附属小学校の現状

本校園は，これまで歴史的に，幼小中が連携してカリキュラム研究を行ってきており，文部科学省の研究開発学校の指定も受けてきている。現在の研究に直接関係のあるものでは，神戸大学附属幼稚園，附属明石小学校及び附属明石中学校の三校園で，平成 12 年度から平成 14 年度まで文部科学省研究開発学校指定研究を受け，幼稚園入園から中学校卒業までの子供の学びの過程を整理し「学びの一覧表（本園研究紀要 35 参照）」を作成した。その研究過程において，幼小中 12 年間を見通した，子供の学びを見取る共通カリキュラム（10 視点カリキュラム：①自分の生き方，②人とのつながり，③健全なからだ，④感動の表現，⑤自然との共生，⑥文字とことば，⑦ものと現象，⑧数とかたち，⑨豊かなくらし，⑩世の中のしくみ）を作成し，その実践を「10 視点カリキュラム」として深めていった。

そして，平成 14 年度以来，幼稚園と小学校の教師が，互いに学び合い，成長するとともに，学びの連続性を保障し，幼小接続期の子供にふさわしいカリキュラムを作っていこうと考え，5・6 歳児が合同で同一内容の保育，学習をする「合同学習」の実践を積み重ねている。この取組は，幼小の教師が互いの教育について理解を深め，互いの教育のよさを学び合う手段としては非常に有効であり，互いの教育内容や方法にも影響を及ぼしている。また，子供自身が，小学校を自分の生活空間の一部だと認識し，小学校進学に対する期待を高め，不安を軽減することにも意味があるととらえている。

さらに，附属幼稚園では，平成 22 年度から平成 24 年度まで文部科学省研究開発学校の指定を受け，研究開発課題「幼稚園教育と小学校教育の接続期における円滑な接続のための新分野創設にむけたカリキュラムと指導方法等の研究開発」を行った。この研究は，幼稚園教育と小学校教育の接続に焦点を当てた研究をすることが当初の目的であった。しかし，研究を進めていく中で，接続の部分だけではなくそこに至るまでの教育も明らかにするべきであるとの思いから，本園の３歳入園から５歳修了までの３年間の教育を，10 の方向・40 の道筋で可視化し，「神戸大学附属幼稚園プラン」と名付け，幼小をつなぐ幼児期のカリキュラムを「10 視点カリキュラム（本園研究紀要 36 参照）」として提案した。この研究開発において，今までになかった詳細な観点から子供の発達を可視化したことにより，小学校教育との接続を明確に示すことができるようになった。

そして，本校園は，平成 25 年度より文部科学省研究開発学校の指定を受けることになった。研究開発課題は，「幼稚園と小学校の円滑な接続に資する，子どもの学びに着目した，幼児教育と小学校教育９年間を一体としてとらえた教育課程の大綱となる『初等教育要領』の開発」である。この研究は，社会的資質・能力，汎用的資質・能力，固有的資質・能力という幼小共通の観点で９年間を貫くめざす子供の姿を設定し，『初等教育要領』として提案した（本園研究紀要 37 参照）。同時に，本園で確立したカリキュラム・マネジメントや，資質・能力の発揮，伸長を可視化する実践記録フォーマットを提案した。

本研究においては，同時に行っている文部科学省研究開発学校指定研究「幼稚園と小学校の円滑な接続に資する，子どもの学びに着目した，幼児教育と小学校教育 9 年間を一体としてとらえた教育課程の大綱となる『初等教育要領』の開発」において開発した資質・能力の発揮，伸長を可視化する実践記録フォーマットを活用する。このフォーマットを活用し，子供達が既に獲得している様々な資質・能力を発揮しながら互いに刺激し合い，学びに至るまでの過程を可視化した実践記録を本研究の根拠とする。

２　研究の目的

本研究は，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」10 項目について，具体的な指導方法及び評価方法を明らかにすることを目的とする。具体的には次のとおりである。

中央教育審議会初等中等教育分科会幼児教育部会で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が 10 項目で示されている。本調査研究においては，これら 10 項目について，具体的な指導方法及び評価方法を明らかにすることにより，全国の幼稚園での取組に資することを目的とする。

その際，指導方法の客観性を担保するため，本園のみならず，全国の附属幼稚園や近隣の幼稚園等から事例を収集し，分析を行う。また，評価については，小学校関係者も活用しやすい評価とするため，附属小学校の関係者からも協力を得て評価方法の検討を行う。

これらの取組を推進するにあたり，ICT 機器を導入することにより，中央教育審議会初等中等教育分科会幼児教育部会のとりまとめにも示されている，指導及び評価に活用する先進的な取組を合わせて実施する。

３　研究の仮説

本研究によって，次に示す具体的な成果が期待できると考える。

① 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に向かう環境の構成や教師の援助を，具体的な事例とともに明らかに示すことができる。

② 幼児期及び幼児期と児童期をつなぐ接続期にふさわしい評価方法が明らかになり，幼児教育関係者と小学校教育関係者の評価についての相互理解を進めることができる。

③ 日々の記録を子供の指導及び評価に活用すること，学びの過程を示したり子供の発達の状況を保護者と共有したりすることを，ICT 機器を活用することで一体的に行うことに関する実践的な知見が得られる。

４　研究の方法

本研究においては，次の取組を実施する。

① 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と，本園カリキュラムの「10 の視点」と「39 の下位項目」毎に示した５歳修了時のねらいとの関連を明らかにする。

② 本園の記録を分析し，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながる指導方法の見通しをもつと共に，ICT 機器を用いることが効果的な項目について検討する。

③ 全国の附属幼稚園や近隣の幼稚園等から収集した実践事例を基に，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながる指導方法を明らかにする。

④ 附属小学校教員と連携し，幼稚園での子供の学びを見取ることに重点を置いた評価を接続期の １ 年生の評価に活用することを通して，幼児期から接続期にかけてのふさわしい評価方法を明らかにする。

⑤ 日々の記録を指導及び評価に活かすこと，日々の記録をまとめた学びの過程を示すことを通して保護者と子供の育ちを共有すること等に，ICT 機器を用いて写真や動画等を効果的に活用し，幼小接続期にふさわしい評価に活用する。

Ⅱ　研究の内容

1　事例の収集と分析

本研究においては，平成 28 年 8 月 26 日に中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会において，取りまとめられ報告されている「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」を踏まえ，研究の根拠は事実に基づく事例とし，その収集と分析の具体的な手順を示す。

1）事例のフォーマット

本園で同時に行っている，文部科学省研究開発学校指定研究「幼稚園と小学校の円滑な接続に資する，子どもの学びに着目した，幼児教育と小学校教育 9 年間を一体としてとらえた教育課程の大綱となる『初等教育要領』の開発」において開発した資質・能力の発揮，伸長を可視化する実践記録フォーマットを活用する。

この実践記録フォーマットとその運用の特に重要なポイントは次のとおりである。尚，例示による書式及び詳細な工夫については，12 頁から 16 頁を参照されたい。

◯事実を基に子供の学びをとらえられるように，事実と解釈を書き分ける。
◯必ず子供の事実に基づいて，一人一人の子供の内面を解釈する。
◯どの資質・能力の観点からの解釈かを記録者が自覚的に分析できるように，事実を解釈する際に，発揮，伸長している資質・能力の観点を明記する。
◯環境の構成や教師の援助の事実を振り返り，その時の教師の意図を明らかにする。
◯客観性を担保できるように，集積する事例については，園の職員で検討する。

この新しい実践記録フォーマットは，子供達が既に獲得している様々な資質・能力を発揮しながら互いに刺激し合い，学びに至るまでの過程を実践記録により可視化することを第一の目的として開発したものである。

本実践記録フォーマットでとらえた子供の学びの姿は，具体的な事実に基づいてとらえた姿であるため「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の 10 項目と照らし合わせることができると考えた。また，本実践記録フォーマットにおいては，子供が学びに至るまでの環境の構成や教師の援助についても事実に基づいて詳細に記述している。そのため，本調査研究の目的の一つである「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」10 項目について，具体的な指導方法を明らかにすることができると考えた。